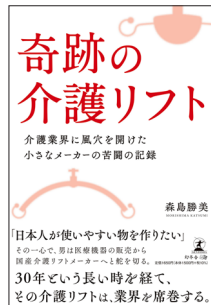


オススメ本案内コーナー

加藤 有香

一般社団法人 日本 ALS 協会 愛知県支部

奇跡の介護リフト
介護業界に風穴を開けた
小さなメーカーの苦闘の記録
森島勝美 著
幻冬舎、2022年、1,650円



「日本製の介護リフトは、あるひとりの吊りバカおやじから生まれた。」わたしはこれから堂々と自慢げにそう言おうと思う（“吊りバカおやじ”とは著者が自称している呼び名である。）。

この書籍は、日本特有の「介護の常識」を変えるべく立ち上がり、挑戦し改革し続けるリフトメーカーのゼロから現在までの軌跡が書かれている。

日本の高齢化率は世界的にみて上位を占める。「寝たきり高齢者」が多いことも特徴的だ。そのような日本の介護現場において、海外の製品が日本人に合わないことは数多くある。当然だ。体格、文化、価値観さまざまな点において違う。もちろん合うものもあるが、ことリフトにおいては体格の小さな日本人には海外製リフトが使いにくい場合がある。そこを越えてきたのが、“吊りバカおやじ”である。リフトだけでなく、吊り具以外のものも「日本人に合ったものを」と改良を重ね製品化してきた。

著者の熱意と信念には誠もって心うたれる。本書ではじめて知る物語に、わたしは笑い、涙した。本をあけてからパタンと閉じるまで、ウキウキが止まらなかった。著者が幾多の壁を乗り越えていく姿も、

わたしは「森島さんのしそうだな」とあのほかほかの笑顔を思い浮かべていた。

著者の魅力はそこにある。エンターテイナーであること、さらにはケア現場全体の応援団長のような存在。製品名ひとつひとつにもその温かさ、優しさ、人柄がにじみ出ている。是非そちらも注目してもらいたい。

わたしは、リフトは相手の身体と時間を大切に思いやる事が出来る最良の福祉用具であると思っている。そもそも、だ。みなさんは、好きなひとでもない、家族でもない、友人でもない人と事あるごとに抱擁できるだろうか。トイレに連れて行ってほしいから抱えてと、ためらいなく頼めるだろうか。それでも尚「介護は人の手で」といえるだろうか。それをあっさり解決してくれるのがリフトであるとわたしは思う。

常識も多様化し、さまざまなことが変化し続けている。リフトは今や、介護現場を越えリハビリテーションの現場でも活躍している。

あらゆる人が楽しく生きるために「あたりまえ」を変えたい。可能性の追求を止めることなく、わたしもとびきりのバカになろう。

一般社団法人 日本 ALS 協会 愛知県支部
〒453-0815 北畑町 3-27-1